

「研究大学強化促進事業」令和元年度フォローアップ結果

機 関 名	令和元年度フォローアップ結果
慶 應 義 塾 大 学	<p>○URA の制度や役割、若手研究者育成の方針に関する一部の事項(研究推進担当 URA の役割、専門員 URA と特任研究員との役割の切り分け、若手研究者に向けた学内研究費の拡充の仕組みなど)については、検討または明確化を進めている段階であるものと判断される。当該事項については速やかに対応が行えるよう検討等を進め、報告を求めたい。</p> <p>○共同研究の推進、研究支援体制の確立に向け、中間的なアウトカムをより具体的に設定し、事業終了までのアウトカムを実現し、ひいては将来構想を達成することが望まれる。</p>

平成 30 年度フォローアップ結果への対応状況と今後の事業展開について

機関名	慶應義塾大学				
統括責任者	役職	学長	実施責任者	部署名・役職	研究担当常任理事
	氏名	長谷山 彰		氏名	青山 藤詞郎

平成 30 年度フォローアップ結果
<p>○全体的には、大学の方針に沿ったURAの活用が図られているが、学内の支援体制におけるURAの位置付けが明確ではなく、本事業による効果が分かりにくい。研究力強化に向けた位置づけの整理が望まれる。</p> <p>○将来構想3「国際的な人材交流や共同研究が活発な大学」では受入ばかりではなく、若手研究者の海外派遣も含め、世界に出ていく取組みの実施が望まれる。</p>

将来構想の達成に向けた現状分析
将来構想 1【分野融合、部門横断研究が充実した大学（特色ある研究）】
<p>① 平成 30 年度フォローアップ結果等コメントへの対応状況 各キャンパスの特色は本学の強みでもあり、その特色を活かしつつ、分野融合・横断研究をすすめていく必要がある。各キャンパスの URA は、まず各キャンパスでの取り組みに貢献することを役割としつつ、キャンパス横断を支援することを主たる目的とした URA も別途配置し、役割の明確化をはかった。</p> <p>② 現状の分析と取組への反映状況 医工連携については、着実に進展しており、URA 間の協力もすすんできている。さらに包括的なテーマや、人文社会をキーとするものについては、本部に全体を見渡せる URA を配置し、全学的な連携をサポートしていくほか、研究者情報 DB の充実とともに、人文社会系のシーズの融合可能性を掘り起こしていく。</p>
将来構想 2【先進的かつインパクトのある研究ができる大学（高度な研究）】
<p>① 平成 30 年度フォローアップ結果等コメントへの対応状況 論文投稿数や次代の研究者育成は、短期間で達成できるものではなく、継続的な支援が必要だが、IR の定期的な実施などを通じ、意識共有と現場へのフィードバックを行う。</p> <p>② 現状の分析と取組への反映状況 海外への論文投稿補助の充実などを行っている。また若手研究者への論文セミナーなども実施している。今後は、URA による IR 活動などを通じて、研究者のモチベーションアップ、有望な若手研究者の掘り起こしなどにつなげていく。</p>
将来構想 3【国際的な人材交流や共同研究が活発な大学（国際的に高い認知度）】
<p>① 平成 30 年度フォローアップ結果等コメントへの対応状況 国際研究連携推進や研究成果の国際共著論文創出、さらには論文のサイテーションと大学としてのレピテーション向上のために海外各国に教員が渡航し、講義や研究発表を実施する。</p>

<p>② 現状の分析と取組への反映状況</p> <p>現状は教員同士の既存のつながりなどから、共同研究などが生じている。これに加え、論文 DB を活用した分野別研究者への本学研究成果アウトリーチ活動、著名な海外研究者等の招聘のほか、大学や研究機関へ教員が渡航しての成果発表などを行うことなどを通じて、国際交流・共同研究への幅広いアプローチを行う。このような幅広い活動の支援のため、ロードマップでの指標として英語を使える専任職員増ということを掲げていたが、人数ありきではなく、包括的な体制づくりを行うこととした。</p>
<p>将来構想 4 【研究成果により社会貢献する大学（実学指向）】</p>
<p>① 平成 30 年度フォローアップ結果等コメントへの対応状況</p> <p>知財に関する知財担当 URA の役割は、ほぼ整理され、共有されているが、研究推進担当 URA の役割に不明瞭な点があるため、明確にしていく。</p>
<p>③ 現状の分析と取組への反映状況</p> <p>知財の管理、創出については、知財担当 URA が主軸となって実施してきている。かつては、教員主導で出願などを行うことも多かったが、次第に組織的な決定ができるように移行してきた。今後はさらに、技術移転や大学発ベンチャー支援に至る部分についても、URA の主体性が活かせる体制とするべく、全体的な役割の再整理、情報と意識の共有化をはかる。</p>
<p>将来構想 5 【研究支援体制が確立した大学（研究時間確保・資金獲得・リスク管理）】</p>
<p>① 平成 30 年度フォローアップ結果等コメントへの対応状況</p> <p>専門員 URA と特任教員との役割の切り分けについては、人事部とともに再度検討を行っている。本学においては、専任職員 URA と専門員 URA が補完し合い、一体となって大学の研究推進に利することを指すが、役割の相互認識を明確にしていく。</p>
<p>② 現状の分析と取組への反映状況</p> <p>研究支援活動ワークフローの効率化をはかるためのシステムが実装され、一部で試用が開始されており、さらなる導入に向けての検討が行われている。若手の研究者に向けては、来年度実施の予定で学内研究費の拡充の仕組みを検討している。</p>

<p>ロジックツリー・ロードマップの利活用・横展開状況</p>
<p>各キャンパスの全ての管理職専任 URA ならびに専門員 URA にロジックツリー、ロードマップの共有がなされ、各役割の部分の再確認を行った。本事業の全体像としての計画・進捗の共有について、地区によってはやや不明瞭な部分もあったが、これによって、全体的な共有内容が明確になってきた。また、新しい制度の策定にも方針を定める指標として活用できた。今後は進捗の把握はロジックツリー、ロードマップをベースに行うことで、事業計画の一層の推進、見直しなどに活かしていく。</p>

<p>特筆すべき事項（定性的な現状・取組状況等）</p>
<p>教育・研究に関する基金の拡充に全学をあげて取り組んでいる。また、稟議の手続きフロー、システムの見直しなども開始しており、より柔軟で効率的な研究支援体制の整備を行っていく。</p> <p>研究の場としては、オープンイノベーションに関する意識の高まりがあり、大学全体としてサポート体制を強化していく。</p>

【参考】論文の質に係る指標について

	Scopus		WoS	
	2013-2017 平均	2014-2018 平均	2013-2017 平均	2014-2018 平均
国際共著論文率	21.4 %	22.2 %	%	%
産学共著論文率	5.2 %	6.4 %	%	%
Top10%論文率	12.5 %	13.0 %	%	%

慶應義塾大学「研究大学強化促進事業」ロジックツリー【概要版】

将来構想

事業終了までのアウトカム
(2021年度-2022年度)

中間的なアウトカム
(2019年度-2020年度)

アウトプット
(2019年度の取組)

アウトプット
(2018年度の取組)

分野融合、部門横断研究が充実した大学
(特色ある研究)

先進的かつインパクトのある研究ができる大学
(高度な研究)

国際的な人材交流や共同研究が活発な大学
(国際的に高い認知度)

研究成果により社会貢献する大学
(実学指向)

研究支援体制が確立した大学
(研究時間確保・資金獲得・リスク管理)

大学内の融合研究の支援

指標(1)	融合研究プロジェクト増
-------	-------------

次代の高度研究者の育成

指標(2)	科研費「新学術領域」領域代表採択
指標(3)	Impact Factorの高い論文誌掲載数増
指標(4)	論文被引用数向上
指標(5)	人文社会系学術論文・著作の増

国際共同研究の支援

指標(6)	海外との共同研究・受託研究受入増
指標(7)	英語を使える研究支援専任職員の配置と組織的支援体制整備

産学官連携、技術移転の促進

指標(8)	官民受託研究費増
-------	----------

研究マネジメント支援体制整備

指標(9)	PJプロデュース型URAの設置
指標(10)	自主財源によるURAの設置
指標(11)	若手研究者の支援体制整備

融合研究促進のためのインフラ整備

指標①	研究者情報データベース(K-RIS)の整備
指標②	融合研究マッチング機会の創出
指標③	融合研究の成果報告情報発信

新学術領域の研究提案

指標④	新学術領域に提案できる研究者選定
-----	------------------

海外論文投稿支援強化

指標⑤	研究者向けワークショップ等の実施
-----	------------------

研究IR活動の定着

指標⑥	定期的なIR分析の実施
-----	-------------

人文社会系のIR分析実施

指標⑦	人文社会系の評価指標策定
-----	--------------

国際研究連携重点拠点開拓

指標⑧	海外の研究連携重点拠点の開設
指標⑨	海外へのアウトリーチ活動
指標⑩	海外研究に関する各種ルール整備

産学官連携、技術移転の促進

指標⑪	産学プレアワード活動の活性化
指標⑫	技術移転活動の推進
指標⑬	インキュベーション支援体制強化

学内支援環境整備

指標⑭	各種案件管理のシステム化
指標⑮	URAのキャリアパス検討
指標⑯	若手研究者への個別支援実施

※ 本事業による取組の効果(他の事業等による影響を受けない)が検証可能である指標

研究者情報DBデータ移行と本格運用
文献検索ツールを活用した研究評価・分析の実施
学内マッチング支援のためのコミュニケーションツール検討
研究者交流のためのミーティング設定
融合プロジェクトの学内学外コーディネートおよび契約等事務支援
イベントでの展示による融合研究成果の情報発信
URAによる大型科研費申請支援
国際的影響力の大きい学術論文誌への投稿支援
IR分析と連動した将来目標の定期的策定
URAによる人文社会系IR活動
海外企業との研究拠点サポート
海外研究推進のための研究紹介、人脈開拓等のプレアワード活動
海外機関との契約等折衝
海外研究者招聘によるシンポジウム等の開催支援
日本にある海外出先機関との連携活動
国際的研究支援業務に対応できる総合的組織体制の検討
海外の大学・研究機関等での講演、研究発表等の実施
URAによる研究プロジェクト支援
研究者情報の外部への発信
知財創出(出願)および知財活用(実用化推進)活動
研究受入に伴う各種文書の見直し等相談、セミナー等の開催
ベンチャー起業に関するルール整備
利益相反マネジメントのシステム運用の検討
共同・受託研究等案件管理のシステム運用検討
URA人事の整備検討
URAの研修機会の整備
若手研究者助成の拡充検討

研究業績のリサーチマップ翌日更新機能搭載と外部データベースの論文閲覧性向上
文献検索ツールを活用した研究評価・分析の実施
学内マッチング支援のためのコミュニケーションツール検討
研究者交流のためのミーティング設定
融合プロジェクトの学内学外コーディネートおよび契約等事務支援
イベントでの展示による融合研究成果の情報発信
URAによる大型科研費申請支援
海外論文投稿支援のためのセミナー(URAによる受講)
国際的影響力の大きい学術論文誌への投稿支援
URAによるSciVal説明会受講
URAによる人文社会系IR活動
海外企業との研究拠点立ち上げ支援
海外研究推進のための研究紹介、人脈開拓等のプレアワード活動
海外機関との契約等折衝
海外研究者招聘によるシンポジウム等の開催支援
日本にある海外出先機関との連携活動
国際的業務に対応できるスキルの習得
URAによる研究プロジェクト支援
研究者情報の外部への発信
知財創出(出願)および知財活用(実用化推進)活動
研究受入に伴う各種文書の見直し等相談、セミナー等の開催
ベンチャー起業に関するルール整備
利益相反マネジメントのシステム化
共同・受託研究等案件管理のシステム化
URA人事の整備検討

※ 前年度の取組を発展させた繋がりのある取組

慶應義塾大学「研究大学強化促進事業」後期ロードマップ

(1) 事業実施計画

年度			2018	2019	2020	2021	2022	2023
将来構想	事業終了までのアウトカム	中間的なアウトカム	アウトプット					
分野融合、部門横断研究が充実した大学	大学内の融合研究の支援	融合研究促進のためのインフラ整備	研究業績のリサーチマップ翌日更新機能搭載と外部データベースの論文閲覧性向上	研究者情報DBデータ移行と本格運用				
			文献検索ツールを活用した研究評価・分析の実施					
			学内マッチング支援のためのコミュニケーションツール検討					
			研究者交流のためのミーティング設定					
			融合プロジェクトの学内学外コーディネートおよび契約等事務支援					
	イベントでの展示による融合研究成果の情報発信							
		指標① 研究者情報データベース (K-RIS) の整備		研究者情報データベースの充実・更新				
		指標② 融合研究マッチング機会の創出		情報共有手段の確立				
		指標③ 融合研究の成果報告情報発信		イベント、配布物等による成果の公開				
	指標(1)	融合研究プロジェクト増					研究プロジェクト数倍増 (2016年比)	
先進的かつインパクトのある研究ができる大学	次代の高度研究者の育成	新学術領域の研究提案	URAによる大型科研費申請支援					
		指標④ 新学術領域に提案できる研究者選定		IR分析による候補者の抽出				
	海外論文投稿支援強化	海外論文投稿支援のためのセミナー (URAによる受講)						
	国際的影響力の大きい学術論文誌への投稿支援							
		指標⑤ 研究者向けワークショップ等の実施			エディターとのミーティング			
	研究 IR 活動の定着	URAによるSciVal説明会受講	IR分析と連動した将来目標の定期的策定					

		指標⑥ 定期的な IR 分析の実施			研究活動年報に掲載			
		人文社会系の IR 分析実施	URAによる人文社会系 IR 活動					
		指標⑦ 人文社会系の評価指標策定			評価尺度を導入			
	指標(2)	科研費「新学術領域」領域代表採択					1 件	
	指標(3)	Impact Factor の高い論文誌掲載数増					25%増 (2017 年対比)	
	指標(4)	論文被引用数向上					SciVal FWCi 25%増 (2017 年度調査対比)	
	指標(5)	人文社会系学術論文・著作の増					1.2 倍 (2017 年対比)	
国際的な人材交流や共同研究が活発な大学	国際共同研究の支援	国際研究連携重点拠点開拓	海外企業との研究拠点立ち上げ支援	海外企業との研究拠点サポート				
			海外研究推進のための研究紹介、人脈開拓等のプレアワード活動					
			海外機関との契約等折衝					
			海外研究者招聘によるシンポジウム等の開催支援					
			日本にある海外出先機関との連携活動					
			国際的業務に対応できるスキルの習得	国際的研究支援業務に対応できる総合的組織体制の検討				
				海外の大学・研究機関等での講演、研究発表等の実施				
	指標⑧ 海外の研究連携重点拠点の開設			欧米アジアにおいて 5 拠点				
	指標⑨ 海外へのアウトリーチ活動		研究成果広報活動の充実					
	指標⑩ 海外研究に関する各種ルール整備			ルール設定				
指標(6)	海外との共同研究・受託研究受入増					1 億円以上		
指標(7)	英語を使える研究支援専任職員の配置と組織的支援体制整備					全キャンパスで 9 名以上と体制整備		
学 研究成果により社会貢献する大	産学官連携、技術移転の促進	産学官連携、技術移転の促進	URAによる研究プロジェクト支援					
			研究者情報の外部への発信					
			知財創出（出願）および知財活用（実用化推進）活動					
			研究受入に伴う各種文書の見直し等相談、セミナー等の開催					
			ベンチャー起業に関するルール整備					
指標⑪ 産学プレアワード活動の活性化			プレアワード活動のための組織編制					

		指標⑫ 技術移転活動の推進			知財戦略策定（知財管理活用の方針）			
		指標⑬ インキュベーション支援体制強化		学内諸規定整備				
	指標(8)	官民受託研究費増					100億円	
研究支援体制が確立した大学	研究マネジメント支援体制整備	学内支援環境整備	利益相反マネジメントのシステム化	利益相反マネジメントのシステム運用の検討				
			共同・受託研究等案件管理のシステム運用検討	共同・受託研究等案件管理のシステム化				
			URA 人事の整備検討					
			URA の研修機会の整備					
			若手研究者助成の拡充検討					
			指標⑭ 各種案件管理のシステム化			ドキュメント管理、ワークフロー改善のシステム化		
	指標⑮ URA のキャリアパス検討			シニア URA の設置				
	指標⑯ 若手研究者への個別支援実施			産学連携、研究連携実施				
	指標(9)	PJ プロデュース型 URA の設置					3名	
	指標(10)	自主財源による URA の設置					23名	
	指標(11)	若手研究者の支援体制整備					URA による認知度向上活動と研究啓発の場の設定	